

短大生の『実習』に関する一研究（3）

幼児教育学科 山 田 郭 子
角 田 道 代

本研究の目的

本学紀要に発表した過去2か年の研究「短大生の『実習』に関する一研究」(1)・(2)では、保育実習・幼稚園実習に関わる学生の意識調査をもとに結果の分析と考察をおこなった。

今回は、学生の実習が就職の動機づけや意識にどのように反映されるかを検討するために、アンケートによる就職意識調査を実施した。

これまで継続して短大生の実習に関するさまざまな問題を追究してきたが、今回は、3年間の研究から得られた貴重なデータや実習指導担当者としての反省事項をもとに、保育者養成校における望ましい実習のあり方について総括的な「結論」を述べる。

1. 就職意識調査

(1) 調査対象 本学幼児教育学科第一部2回生 47名

(2) 調査の時期 平成19年8月

(3) アンケート調査の内容

① あなたは、就職できるとしたら、幼稚園・保育所・その他のうち、どちらを選びますか。

下の3項目の一つを○で囲み、選んだ理由を [] 内に記入してください。

幼稚園 保育所 その他

その理由 []

② あなたが実際に幼稚園や保育所に就職することになったら、不安に思うことは何ですか。

下の [] 内に、不安に思うことを具体的に書いてください。

不安に思うこと []

③ 今、あなたが努力していることは何ですか。下の4項目の中から1つ、または2つ選んでその項目を○で囲んでください。4項目以外のことがあれば、その他として [] 内に記入してください。

書く力・読む力 生活力 コミュニケーション能力
実技力（音楽・造形） その他 []

④ あなたは、どのような園（幼稚園・保育所）に就職したいですか。自分が希望する「条件」を下の [] 内に具体的に書いてください。

私はこんな園（幼稚園・保育所）に就職したい []

(4) 結果と考察

① 希望する就職先

幼稚園・保育所・その他の3項目からの選択結果は、次のとおりであった。

- 幼稚園 8人（17%）
- 保育所 28人（60%）
- その他 11人（23%）

② 幼稚園を希望する理由

回答が自由記述だったので、内容が類似したものは一つにまとめ、下記の項目に分類した。

- 幼稚園での実習の印象がよかったから
- 自分に適した職場だと思うから
- 早出・遅出などがない勤務形態が魅力だから
- 乳児の安全指導に不安を感じるから
- 幼児教育に興味があるから
- 担任として学級経営がしたいから
- 自分が幼稚園の出身だから

③ 保育所を希望する理由

幼稚園の場合と同様に、回答を分類した。

- 乳児の保育に関わりたいから
- 保育所での実習の印象がよかったから
- 自分に適した職場だと思うから
- 教育よりも生活に密着した職場だから
- 親の代わりになって子どもの身辺自立を援助したいから
- 自分が保育所の出身だから
- 保育所は求人が多いから
- 0歳～5歳児の保育が魅力だから
- 長時間保育に携わりたいから
- 保育所は複数担任制だから
- 共働き家庭を支援したいから
- ピアノが苦手だから

結果①・②・③についての考察

まず就職先として、幼稚園よりも保育所を希望する学生が圧倒的に多いことがわかる。

保育所を希望する者が多いのは、次のような理由によると考える。

- 教師として保育に携わることに不安が強く、副担任制を希望していることからわかるように、自分が学級担任として、責任をもってクラス経営にあたる自信がない。
- 生活＝養護と理解しており、自分の保育技術が未熟で、十分な自信はもてないけれども、乳幼児の世話なら楽しさもあり、保育士の仕事としてなんとかやっていると考えている。

- 幼稚園は採用試験もほとんどなく、合格する可能性も乏しい。それに対して、保育所は、社会的な保育ニーズの高まりから、保育所入所待機児が増加し、求人も多いので、就職の希望が叶う確率が高い。

④ 幼稚園就職に対する不安

回答が自由記述のため、上記②、③と同様に、内容が類似したものを一つにまとめ、下記の項目に分類した。⑤についても同様にした。

- 一人担任制であり、それによる重い責任に耐えられるかどうか
- 少人数の女性の職場で、安心できる人間関係が保たれるかどうか
- 保護者との信頼関係が構築できるかどうか
- 少子化により求人が減少し、就職を希望しても採用される可能性があるかどうか

⑤ 保育所就職に対する不安

- 過重な労働に耐えるだけの体力があるかどうか
- 0歳～6歳までの乳幼児について心身の発達過程を把握し、的確な指導ができるかどうか
- 子どもの年齢や発達に応じた保育技術を身につけていない
- デイリープログラムに順応した保育ができるかどうか
- 適切な子育て支援をすることができるかどうか
- 発達障害や問題のある子どもに対して、適切な特別支援ができるかどうか
- 保育に関する多くの法律や法令を十分に理解して仕事に従事できるかどうか
- 保護者との信頼関係が構築できるかどうか
- 地域や関連する他機関との連携がしっかりとできるかどうか

結果④、⑤についての考察

就職先を幼稚園、保育所と想定した場合、学生たちが抱く共通した不安は、職場の人間関係や保護者との信頼関係が保たれるか否かという点である。それ以外では、職場である幼稚園と保育所の特色あるいは両者の相違点に密接に対応した形で、「不安」が感じられていることが明らかになった。

幼稚園就職についての不安は、種類としては多くないが、それだけに共通したことがらに不安が集中していることがわかる。それは次の8項目である。

- 求人数が極めて少なく、正採用の可能性がほとんど無いような状況にあること
- 幼児教育の場として、求められる実践や保育技術のレベルが高いこと
- カリキュラムや指導案の作成、さまざまな研修など、精神的に負担を感じる仕事が多いこと
- 一人担任制は重い責任のある仕事であること

これに対して、保育所就職についての不安は、以下に示したように種類も数も多い。

- 保育所は、0歳から6歳までの乳幼児について、その心身の発達を理解し、それに応じた適切な保育や指導を求められるが、今は、とてもそこまでは自信がもてない。

- 保育所には障害や問題をもった子どももいるが、短大では、そうした子どもに対する正しい理解や適切な対応の仕方を十分に学んでいない。
- 保育所に関連する法律や法令が多くあるが、それに対する知識が不十分である。
- 保育所は夏季休暇などの休みがなく、労働時間も長い。そこで仕事を続けていくだけの体力に自信が持てない。

⑥ 今、努力をしていること

設定した5項目から複数選択を認めたので、以下にその結果を比率の高い順に示す。

- 実技力（音楽・造形） 26人 （39.4%）
- コミュニケーション力 21人 （31.8%）
- 生活力 10人 （15.2%）
- 書く力・読む力 7人 （10.6%）
- その他 2人 （3.0%）

結果⑥についての考察

- 「実技」の中でも、ピアノの演奏、描画、手作りなどの技能は、採用試験などの成績にも大きく影響するし、就職後においても欠かすことのできない保育技術である。その点を自覚し、今、約4割の学生が努力をしていることが明らかになった。
- 「コミュニケーション力」とは、他者の話や発言に耳を傾け、自らも、必要な場面で要領よく発言し、人と人との交流を図る能力のことである。学生は、日ごろの授業や会議などの場面で、こうした力を身につけることの必要性を理解していたに違いないが、各種の実習を経験することにより、いっそうこの点についての努力の必要性を感じたことと思われる。
- 「生活力」という言葉は色々に解釈されるが、一人の人間として、精神的にも、経済的にも自立し、生きていく力と考えてよい。上記の15%という数字は、卒業を半年先に控えた短大生ではあるが、その点の自覚が芽生えていることを示唆すると言えるだろう。
- 「その他」としては、一般教養を身につけることの必要性を感じ、この点で努力しているという回答があった。

⑦ こんな園に就職したい

就職するとしたら、どんな園を希望したいかを聞いたところ、さまざまな回答が寄せられた。それらを幼稚園希望者と保育所希望者に分け、それぞれの「希望内容」を要約した。結果を以下に示す。

○幼稚園希望者

- 楽しい雰囲気の幼稚園
- 先生同士が仲のよい園
- 教育方針に偏りのない園
- 自己能力が発揮可能な園
- 研修に意欲的な園

○保育所希望者

- 温かい家庭的な雰囲気のある園
- 子どもの興味関心を大切にしている園
- 子どもも保育者も自分らしさを生かし合える園
- 自然環境に恵まれている園
- 何かあったら相談しやすい園
- 子どもの主体性を大切にしている園
- 保育環境に恵まれている園
- 安全性に配慮している園

⑦の結果についての考察

就職先が幼稚園であっても、保育所であっても、若い学生が望む条件には、さほど差はなく、むしろ次の点で共通していると考えてよさそうである。

- 雰囲気が明るい
- 人間関係がよい
- 個人を大切にする
- 教育方針に偏りが無い
- 環境がよい

要するに、学生は、将来、自分が受容され、満足や生きがいを感じて働くことができる園への就職を希望していると言える。

2. 「短大生の『実習』に関する研究」(1)・(2)・(3)から得られた総括的な結論

3年間継続した研究において、第1年目は保育所実習の事前・事後に、短大生を対象にアンケート調査を行い、①実習への期待、②実習での楽しかった経験、③実習で学ぶことへの期待、④実習で学んだこと、⑤実習を前に実行をしようと心がけたこと、⑥実習中に実行できたこと、⑦実習前の不安や気がかりなこと、⑧実習中のつらかったこと、について回答を求めた。

第2年目には、幼稚園実習について同じ調査を実施し、その結果をもとに、保育所実習と幼稚園実習の相違点や共通点について比較し検討をおこなった。

その結果、実習の実態が明らかになり、今後の実習指導に役立つ貴重なデータを得た。

3年目の今年も、アンケートによる就職希望調査を実施し、実習が就職の動機づけや選択にどのような影響を及ぼしているかを探ることを試みた。その結果、求人が極めて少なく、採用試験がおこなわれても、競争率も高い幼稚園への希望よりは、採用される可能性のある保育所への希望が圧倒的に多いことが明らかになった。また、就職に際しての不安や希望する園の条件については、多くの共通点が見出されたが、それらが実習での体験にもとづいていることが伺われた。これらのことから、実習体験が学生の学園生活や就職選択などに重要な影響を及ぼしていることが明らかになった。

以上の研究結果から、最終的に著者らが得た結論は、短大生の実習を実りあるものにするためには、何よりも事前に実習課題をしっかりと設定し、実習期間中は、その課題解決のために取り組む努力が必要であり、さらに、実習後に課題の達成度を検証し、そこでの評価と反省を新たな課題に盛り込んでいくことが大切であるとの結論が得られた。

以下に、本研究の総括として、まず実習課題の設定の必要性を述べ、次いで実習指導の望ましい課題について見解を述べる。

(1) 実習課題設定の必要性

実習を学生にとって真に実りある学習経験とするためには、最初に実習課題を明確にして実習に臨むことが大切である。

実習課題を大別すると、養成校側が授業などで学生に課す課題と、学生自身で立てる課題の2つがある。前者は授業の中で必要な事項を事前指導の内容として全員に課していく。後者の課題は実習に行く前に自分自身で考えて設定する課題である。いわゆる「自分で考えて立てる」ということである。

有意義な実習は、この実習課題の立て方から始まると言っても過言ではない。そのためには「自分がどのような保育観を持っているのか」、「自分はどのような保育者になりたいのか」、「自分にはどのような長所があり、どのようなところが不足しているか」などについて、しっかりと把握しておくことが大切である。

なお、実習課題は、実習経験の時期や段階によって次のように異なるので、この点についても配慮することが望ましい。

① 初期段階・・・見学・観察実習が中心

子どもや保育者の動きを観察することが中心である。この場合、明確な課題として具体的な観察の視点をもって実習に臨むことが必要である。これが子どもや保育者をしっかりと見る目を養うことにつながるのである。

② 中期段階・・・参加実習が中心

保育にどのように参加したいのか、子どもたちにどのような援助をしたいのかなど、より踏み込んだ課題を立てることが大切である。

③ 終盤のまとめの段階・・・責任実習を多く含む実習

実習園や担当クラスの全体を見通せる力を備えていることが望まれる。従って、この時期には、担当する子どもの発達を考慮に入れた課題設定が必要である。

(2) 望ましい実習指導課題

① 実習課題の焦点化と自己診断能力の養成

まず、実習では、自分として、何を、いつ、どのように学ぶべきか、という点に焦点を当て、自分自身が取り組むべき課題を設定することが必要である。回を重ねるにつれて、課題の内容も深めていかななくてはならないが、そのためには、実習内容を知り、自分で考え、気づく、いわば自己診断能力ともいうべき力を磨くことの必要性を強調しておきたい。

② 主体的学習への取り組み

実習を重ねることによって、実習当初に抱いていた不安も徐々に解消され、保育士資格、幼稚園教諭免許取得への意欲や望ましい保育者像へ向けた自己実現の姿が見られる。また、自己を高める課題は一人ひとり異なることの自覚も養われていく。受身的な学習から能動的な学習への高まりを育て、主体的な学習への取り組みができるように仕向けていくことが大切である。

③ 幼稚園と保育所の相違点・共通点の把握

実習園での担当については、年少児、特に保育所では乳児担当の希望が多い。また、就職先につ

いても保育所希望が大半を占める。その理由として、多くの者が保育は年少児相手のほうが楽であり、年長児はむずかしいといった先入観でとらえている。また、未満児の保育における複数担任制を仕事の魅力ととらえている学生も多い。このような保育の難易度や魅力のとらえ方は誤っており、子どもの発達や真の保育のあり方への無知や自信の欠如を示すものである。子どもの心身の発達に即した正しい幼稚園教育、保育所保育への理解を推し進める必要がある。

④ 保育者養成校と実習園との密接な連携

実習に関して、養成校で学生に指導したことがらと、実習園が実習生に求めるものの間に隔たりやズレがあり、そこから思わぬ問題やトラブルが生じることも少なくない。実習前の園訪問時には当然オリエンテーションを行うが、対象学生の人数が多いこともあって、ほとんどの場合、一般的な注意事項の伝達や事務的な連絡の指導が精一杯という状態である。オリエンテーションの内容を一人ひとりに徹底させ、本人への具体的なアドバイスをすることが望ましいが、残念ながら、必要にして十分な時間設定が不可能な現状にある。

⑤ 個々の学生のリテラシー（読み書き能力）の強化

実習生に対する実習園の成績評価項目の中で目立ったのは、「実習日誌の記入と提出状況」の評価が低いことだった。これは、学生が書いて提出した実習日誌の文章表現が的確さを欠き、誤字・脱字などが多かったことを物語っている。短大における実習の授業でも、日誌の書き方については指導に力を入れているが、指導に当たる経験豊かな保育者から見れば、実習生が書く日誌の内容や記述は、多分稚拙なものに映るのだろうと思う。これは単に実習日誌の問題ではなくて、一般的に学生たちの基礎的なリテラシー、つまり読む力、書く力が低下している実態を示していると考えられる。

この問題を解決するためには、大学の授業において、教科書の読解やノートの取り方、レポートの書き方の指導をはじめ、A G H（ホームルーム）などの時間を使って具体的な練習をおこなうことが必要である。

⑥ 個々の実態（実情）に対応できる実践力の養成

短大2年生は、ようやく成人式を迎える世代である。若いがゆえに、学力や教養面をはじめ、日常生活や心情面においてもさまざまな問題を抱えている。実習の際に、こうした未熟な面が色々な形で表面化し、指導に当たってくださる先生方に思わぬ負担をおかけすることになる。下に、個々の問題あるいは実情に対応して養成校として取り組むべき指導内容を示した。

- 学力が不足している・・・基礎学力や一般教養の向上
- 日常生活習慣が乱れている・・・体力の向上・生活リズムの遵守・労働意欲の高揚
- 家庭生活経験が乏しい・・・家族援助や子育て支援能力の養成
- 感受性や情操が欠けている・・・自然体験や豊かな文化とのふれ合いによる感性の育成
- 奉仕的心情が欠如している・・・思いやり、助け合い、ボランティア精神の涵養

⑦ 保育者としての基礎的資質の向上

短大2年生で、卒業を半年後に控えた学生たちではあるが、近い将来、保育者としての資格を取得し、実際に現場で働くプロとしてみた場合には、まだまだ学ぶべきこと、身につけねばならないことが数多くある。そうした資質の向上も重要な課題の一つとして下に示した。

- 乳幼児期の心身の発達特性についての理解を深める
 - 正しい子育て観・教育観が持てるように指導する
 - 子育ての基本となる受容と共感の態度を養う
 - 子どもとの学び合い、育ち合いを大切にする保育者養成をめざす
 - 子どもに夢と希望を与えることのできる保育者養成をめざす
 - 的確な判断力を持ち、厳しさと優しさを兼ね備えた保育者養成をめざす
- ⑧ 養成校における適切なカリキュラム編成

実習は、単に参加する学生に大きな教育的効果をもたらすだけではなく、養成校にとっても、日ごろの養成のあり方・内容・方法に関して反省・評価をおこなう貴重な機会となる。

そうした評価や反省を、常にカリキュラム編成に生かし、改善をはかる柔軟さが、よりよい実習の推進には不可欠である。たとえば、乳幼児保育の実技・実習のカリキュラムに、小児保健や養護原理などの他教科の学習を関連づけ、事前指導内容として履修するような工夫が考えられるのではないか。もちろん、教科の進度や実習の時期との兼ね合いもあるから、養成校で学んだことが、すべて実習で役立つようにすることは不可能ではあるが、実習を想定した養成校でのカリキュラム編成という視点は大切にしなければならない。

⑨ 実習の事後指導の充実

多くの学生たちは、実習をとおして実にさまざまなことを学び、色々な感動を体験し、心を喜びや達成感で一杯にして養成校に帰ってくる。わずかの実習期間なのに、人間的に大きな成長を遂げた感じを受けることもしばしばある。しかし、一方では、心身ともに疲労困憊し、時には精神的に大きなショックや深刻な痛手を受けて戻ってくる学生の存在を見逃すわけにはいかない。

個々の学生の実習園における履修状況や成績などについて把握することは可能であり、全体的な反省会は実施している。しかし、実習後、休む間もなく展開される授業や行事の流れの中で、一人ひとりの実習体験や実情に即したきめ細かい事後指導をおこなうことは容易ではない。この点の課題を解決するためには、実習指導は、事前・事後の指導はもちろん、実習期間中の連絡や指導なども、学科あるいは大学全体で取り組む体制を整え、実習担当教師を中心に、クラス担任教師、時には学生相談担当者などが緊密な連携をはかって取り組むことが必要である。

終わりに

以上、3年間にわたって、短大生の実習について、アンケート調査などをもとに、さまざまな角度から検討を加え、そこから得られた結論を述べた。

「実習は、保育者になろうとする者が、初めて幼児に接し、教育観や教育的情熱を新たに持つとともに、大学において、それまでに学んできた基礎となる理論を実際に確かめる機会である。(中略)

保育者に対する理想像や人間愛を持ち、人格を高め、よりよい保育者になりたいと自覚するためにも、保育の現場を知ることは是非必要なことである。免許や資格を取得するための手段としてだけ考えるの

ではなく、人間形成、人格形成をしていく重要な学習であると受けとめ、主体的に学習に取り組むことが望まれる。」(本学発行「幼稚園実習・保育実習の手引き」より)

社会から期待される優れた保育士・幼稚園教諭を世に送り出すために、保育者養成の目的・意義を再確認し、常に望ましい内容や方法を追究していくことが、養成校に課せられた重要な役割であると私たちは考えている。

引用文献

権藤真織・安齋智子 「幼稚園・保育所・施設 実習ワーク」 萌文書林

奈良文化女子短期大学編 「幼稚園実習・保育実習の手引」

山田郭子・角田道代・今井靖親 「短大生の『実習』に関する一研究」(1) 奈良文化女子短期大学紀要第36号
89～98.

山田郭子・角田道代・今井靖親 「短大生の『実習』に関する一研究」(2) 奈良文化女子短期大学紀要第37号
83～95.

謝辞

短大生に対する望ましい実習指導のあり方を模索しつつ、今回、3回目の研究をいたしました。第1回目より、奈良教育大学名誉教授 今井靖親先生より、多くのご指導、ご助言を賜り、第3回目の本研究で、一応のまとめと方向性を見出すことができました。ここに厚く感謝申し上げます。

